

受信から発信への橋渡し

——『プラクティカル ジーニアス』を軸とした語彙指導

杼原 均



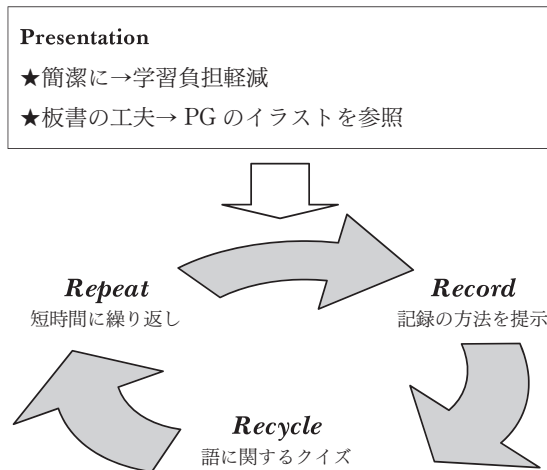
近年電子辞書の普及とともに辞書指導のワークショップも多く見受けられるようになり、辞書指導の重要性は再認識されてきていると思います。本稿では、『プラクティカル ジーニアス』（以下PG）を軸とした日頃の授業実践の一部を紹介させていただきます。

1. 発信を意識した語彙指導の流れ

学習者が未知語に出会ってからその語を発信できるまでにはいくつかの段階がある。まずその語を覚えるためのinputが必要であるし、どのような語と共に使う語か、どのような場面で使うべき語かなど様々な語法や背景知識が不可欠である。

そのため私は、図1のように、語の導入(Presentation)の後、3R's (Repeat → Record → Recycle) のサイクルで授業を展開している。

図1 『プラクティカル ジーニアス』を軸とした語彙指導の流れ



1.1 Presentation

First impressions are the most lasting. と言う。語の第一印象は大切にしたいと考えている。動作や物で

示すことができるようなものはできるだけその場で示すようにし、またPGには語の概念を示すイラストが随所に掲載されているので「これはいい」と思ったら板書している。例えば、PGのbranchの項に添えられているイラストを板書することによって、branchの原義【「枝」から「枝状のもの(支流・支局)」をさす】という語の概念が分かりやすく頭に入ってくる。

新出語句導入においては、その語をどのレベルまで教えるかということを意識しておくことが大切であろう。英語IやIIの教科書であればページごとにいくつかの新出語(句)が本文にあるが、私はそれらを同じように扱うのではなく「見て意味さえ分かればよい(receptive)」単語なのか「単語が正しく使える(productive)」レベルまでのものかを大まかに区別している。その1つのめやすとして、PGのAランク(約1100語)からDランク(約31000語)までのランク表示が大いに参考になる。そして毎回の授業においてWords for todayを選定しておき、記憶に留めやすいようにその語に関するトリビアを紹介したりする。時間の制約もあるので平均3～5語といったところである。

新出語句と共に派生語、類語、反意語等々を一度に提示すると、学習者が覚えられないだけでなく、混乱を招く結果になりかねない。まずは覚える核をつくることが大切である。

1.2 Repeat

反復練習は語学学習には欠かせない。口頭で行うことが多いが、「英語から日本語」から「日本語から英語」「英英辞典の定義」とバリエーションを加えて、できるだけ短時間で済ませるようにしている。

1.3 Record

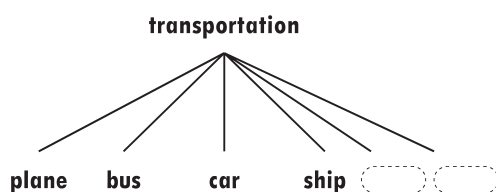
英単語とその訳語だけを書き写している生徒が多く

見受けられるが、マッピング、図表、グルーピング、スケールなど視覚的に記録する工夫の例を提示している。

例えばPGのtransportationの項で《飛行機・船・列車・車など》とある。ここで図2を板書する。図によって上位語と下位語の概念がより理解できるだろうし、関連語のまとめにもなる。

ポイントは、指導者が全部を書くのではなく学習者が後で書き足しができるようにわざとブランクを空けておくことである。また定期的にノートを提出させ、よく調べてあるものや工夫してあるものに対しては評価にボーナスポイントをプラスしている。

図2



1.4 Recycle

形を変えて語を再提示することによって、類語との区別、関連語への広がりが可能となり、その語を発信するための足がかりとなる。クイズは短時間でできる効果的な辞書活動の好例ではないだろうか。

〈関連語を問う問題〉

Q: Put these parts of the leg in order from highest to lowest. (thigh, knee, heel, calf, foot, ankle)

[PGではbodyの項にイラストがあり、これを見れば一目瞭然]

〈日本語と英語の意味範囲の違いを問う問題〉

黒板に「頭から肩」の絵を書いて、

Q: Where is the shoulder?

生徒を指名してその部分に色をつけさせる。その他、odd one outによる類語の区別など、まだまだ工夫の余地は多いアクティビティである。

2. The more, the merrier

PGの特筆すべき点の1つとして、語に関するjokeが掲載されていることがある。これはuserが「用がなくても自然に辞書を手にする工夫」の1つではないかと敬服した。jokeには、英語圏の歴史や文化的背

景知識、英語の韻やダブルミーニングを知らなければ理解できないものなどがあり奥が深い。みんなが笑っているjokeのオチが分からないことほどつまらないことはない。

紹介の手順としては、こちらで英文を読んだり、あるいは板書してクラス全員に何がおもしろいかを考えさせた後、オチが分かった生徒に説明をさせている。オチが分かった生徒の顔は輝き、まだ分からない生徒は必死に考える姿が毎回見られる。特にブラックジョークは生徒にも好評だ。中にはPGのjokeを拾い読みしている生徒もいるので、洋書の“Jokes for kids”なるものを折を見て紹介している。ただその選定は案外難しく、その点PGのjokeは日本の英語学習者に分かりやすいものを厳選して収められているようなので、その選定基準はネタ集めの参考となっている。さらに、少し分かりにくそうなjokeには◆の印がついていて、どこがおもしろいかが説明がされているのもよい。

3. 圧縮から解凍へ

辞書の紙面は限られている。ユーザーにとって多くの情報をいかに無駄なく掲載できるかに辞書編纂者たちはしのぎを削っていることであろう。それゆえわずかなスペースに中身の濃い情報が凝縮されていることがよくある。しかし圧縮されているゆえに、学習者の中には、一度では理解できないところもあるように思える。そこで指導者の役割は、辞書に記載されている、時に圧縮された情報を解凍して学習者に示し、彼らの理解を容易にすることである。

*

「辞書指導」とは、つまるところ情報検索技術を養わせ、必要な情報を探して、それをいかに生かしていくかを教えることではないだろうか。それは、これからの社会ではなくてはならないものであり、また卒業後もすぐに実社会で非常に役立つ技術である。

英語の教師として、進化し続けるPGと共に「辞書指導」と肩ひじはらず「さりげなく」「気長に」をモットーに、学習者と「知識の泉」を探索していきたいと常に考えている。

(とちはら ひとし・三重県立飯野高等学校教諭)